

ぬのざわ 布沢の衣掛け松 まつ

東和町

昔むかし、大昔のこと、野や山は霞に包まれ、遠く西の方の山々もかすんで見える、春も遅い暖かい日が続く或る日の事でした。

若い弁天様は、木の芽のふくらむ音や、小鳥が木から木へ移りさええずる声にじつとしていられず、美しく着飾って羽衣はごろもに身を包み、青い空に向かつて飛び立ちました。

しばらくして、木のあまり生えていない山にふんわりと降りてみました。白猪森しろいのちりです。白猪森は、口太山くちぶとやまとこの里で一番高い麓山ふもと(羽山)の間まにあり、網代傘あじろがさを伏せたような形で、上の方は平らで広い所だったといます。山一面に赤や黄色、白など色とりどりの花が咲き乱れ、蝶も交じり飛び、西山の残雪は灰色に変わり、弁天様は、ただ呆然ぼうぜんとその素晴らしい景色を眺めておりました。

弁天様がふと足もとを見ると、そこに拳こぶしを挙げ、弁天様を呼んでいるかのような形をした草が生えていました。初めて見る草で、蕨わらびとは知らず、物珍しさからひと抱えも摘み続けました。そうしているうちに蕨の根元に生えていた茅ちがやで、さつと指を切つてしまいました。「痛い、ああ痛い。」と言っているうちにも、白い肌の手は赤く染まり、せつかく今まで喜んで採った蕨を、「いまましい、こんなものを摘んでいたから、こんなことに。」と、辺り一面にまき散らしたといえます。それからこの辺りは、白猪森でも蕨が生えない所と伝えられています。

怒りも鎮おさままらぬまま、弁天様は再び西の方を目指して飛び上がりました。見下ろすと、樹々きぎの芽が美しく口を開き、弁天様に声をかけてくれているようでした。幾山か越えて山の間を見下ろすと、水がこんこんと湧き出ている所があったので、弁天様は、そこに静かに降り立ちまし